

第1期卒業生及び教員による愛媛県立医療技術大学カリキュラム評価

奥田美恵*, 関谷由香里*, 矢野朱**, 黒田優子***,
佐田榮司** (平成18-19年度教務委員会ワーキンググループ)

Curriculum Evaluation of Ehime Prefectural University of Health Sciences by Teaching Staff and First Graduated Students

Mie OKUDA*, Yukari SEKIYA*, Akemi YANO**, Yuko KURODA***, Eiji SADA**

序 文

愛媛県立医療技術大学は、平成16年に、前身である愛媛県立医療技術短期大学から大学へと移行し、医療系4年制大学としてのカリキュラムに基づいた教育が開始された。それから4年を経た平成20年3月に第1期の卒業生を世に送り出すこととなった。

教育課程すなわちカリキュラムとは学生たちが学校の教育目的に即して望ましい成長発達(変化)を遂げるために必要な諸経験を、彼らに提供する意図的、組織的な教育内容の全体計画であるとされている¹⁾。また、カリキュラム評価は、そのカリキュラムを改善する上での意思決定に役立つ情報を与えるものと考えられており²⁾、多くの大学にて実施されている³⁾⁴⁾。この度、学生を主体とした、今後のカリキュラムならびに教育活動の改善を目指して、第1期生からのカリキュラム評価を得るために、卒業直前に質問紙調査を行った。また、学生を主体とした教育を実施するためには、学生と教員とのカリキュラム全般についての認識・評価の相違の有無と、その相違を明確にしておくことが重要である。そのため、教員に対しても同様の質問紙調査を行ったので、第1期生の結果とあわせてここに報告する。

目 的

愛媛県立医療技術大学第1期生からのカリキュラム評価を得て、学生を主体とした、今後のカリキュラム並びに教育活動の改善を図るための資料とする。また、現行カリキュラムに関する、学生と教員との認識・評価の相違を明確にし、更に、学生主体の教育へと改善を図るための資料とする。

方 法

調査対象

1. 本学第1期の卒業生(以下学生とする)、看護学科59名、臨床検査学科19名、編入学生8名の計86名。
2. 平成16年4月から平成20年3月の期間に本学に常勤教員として勤務し、平成20年3月時点で在籍していた教員55名。

調査期間

平成20年3月

質問紙の構成

質問紙の質問の大項目は、①教育目標の達成状況、②カリキュラム編成について、③カリキュラムの運用と学生への学習支援、④学生の学習環境についての4項目で構成した。質問紙は、資料1に示した通りである。

分析方法

上記①~④の各質問については、「非常に当てはまる」~「当てはまらない」の5段階評価を用いて、それぞれの度数を算出した。今回の解析では、「非常に当てはまる」「かなり当てはまる」を肯定的意見とし、「あまり当てはまらない」「当てはまらない」を否定的意見とし、「大体当てはまる」は、積極的な肯定ではないと判断し中間的意見とした。自由記載の回答は、記述内容をカリキュラム評価の視点に沿って分類した。

倫理的配慮

本調査の目的、方法、匿名性・プライバシーの保護、調査協力並びに途中辞退は自由意思であること、質問紙の提出をもって研究参加への同意が得られたものとするなどを、学生に対しては口頭で、教員に対してはメール添付の書面で説明した後、調査者が関与しないで、質問紙を配布・回収した。

*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科
***元愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

**愛媛県立医療技術大学保健科学部臨床検査学科

結果と考察

I 回収率

質問紙の回収率は、学生86名中71名（82.6%）、教員55名中22名（40.0%）であった。

II 教育目標の達成状況（図1-1, 1-2）

教育目標の達成状況に関する9つの設問に関しては、学生ではすべての項目に於いて肯定的な回答が多く、否定的な回答は、「4.高度の専門知識・技術を身につけることができた」が11.3%であった以外は、すべて10%未満であった。このことから、本学の教育目標としている項目については十分に身につけることができたと認識している学生がほとんどであるとの結果であり、本学の学生の自己評価は比較的高いと言える。

他方、教員では、8つの項目で肯定的な回答が否定的

な回答を上回り、「2.生命の尊厳を基盤とする態度を養うことができた」「3.豊かな感性により人間の感情・意思及び自己決定権を尊重する態度を養うことができた」では肯定的な回答が特に多く、さらに、「6.保健・医療・福祉教育など他の専門職の役割を理解し、柔軟に協調・協働できる態度を養うことができた」「7.職業人として自らの行動に責任を持つ態度を養うことができた」の2項目では、肯定的な回答は多くなかったが否定的な回答が非常に少なく10%未満であった。教員の評価と比較して、教育目標の達成状況に対する学生の評価は高かったといえる。

III カリキュラムの編成について（図2-1, 2-2）

カリキュラムの編成について、学生では、「4.授業科目間で重複する内容が多かった」「8.専門科目において、基礎科目および専門基礎科目で学んだことが役に立った」「9.興味や関心のある科目が多く設定されていた」で肯定

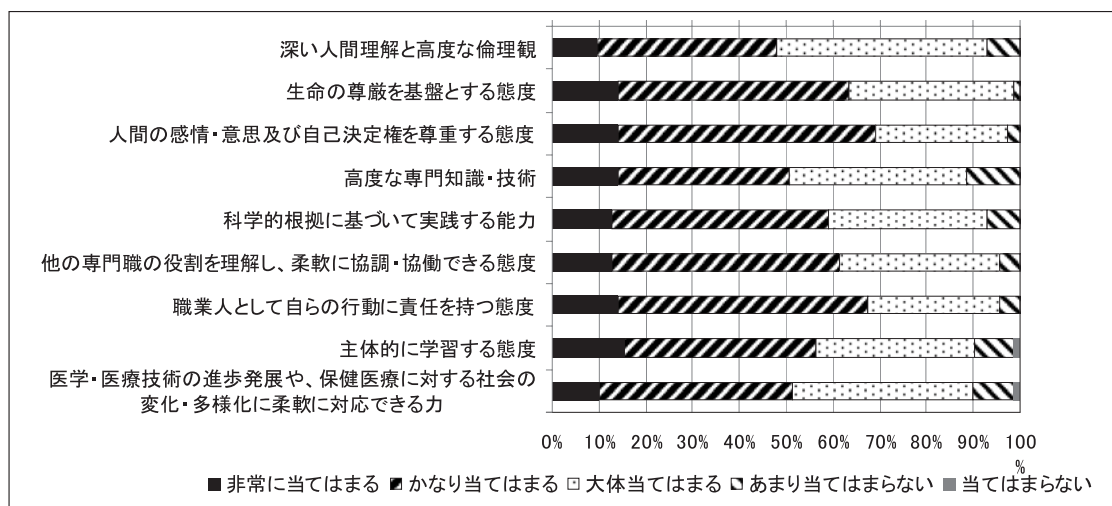


図1-1 教育目標の達成状況（学生）

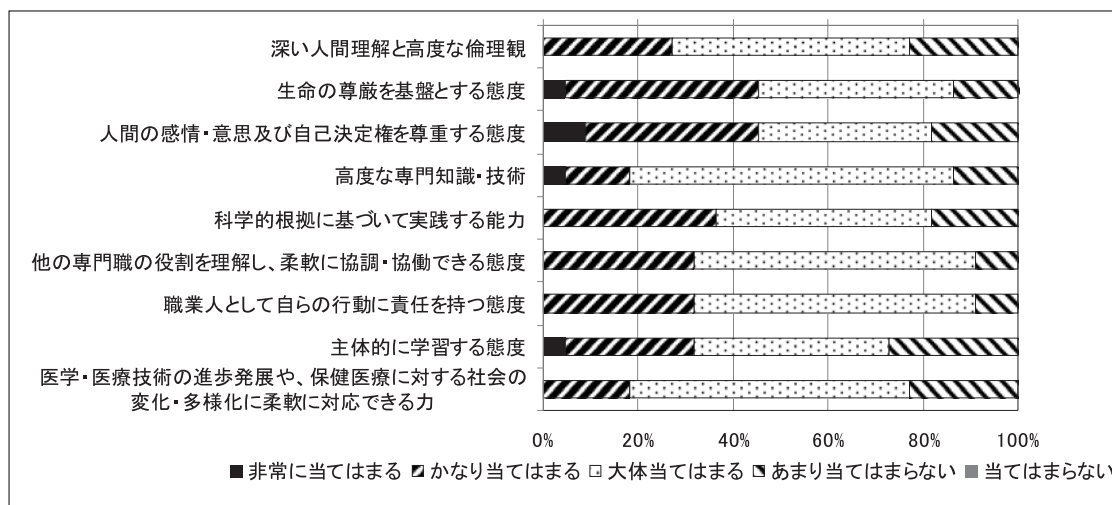


図1-2 教育目標の達成状況（教員）

的回答が多かったが、他の6つの設問では、否定的な回答、あるいは積極的な肯定とは言い難い3を選択する学生が多かった。特に、「1. 授業科目の各学年への配当は学習するうえで適切だった」「5. 各科目の授業時間数は適切だった」「6. 必修科目と選択科目はバランスよく配置されていた」「7. 学生が自由に選択科目を選択することができるように授業科目が配置されていた」に関しては否定的な回答が多くみられた。

他方、教員では「2. 基礎科目、専門基礎科目、および専門科目のバランスは適切だった」「6. 必修科目と選択科目はバランスよく配置されていた」の2つで肯定的回答が多かったが、他の7つでは、否定的な回答あるいは積極的な肯定とは言い難い3を選択する者が多かった。特に「1. 授業科目の各学年への配当（配置）は学習するうえで適切だった」「3. 基礎科目、専門基礎科目、および専門科目の領域間の関連性が適切にとれていた」「5. 各科目の授業時間数は適切だった」の3つに関しては否定的な

回答が多く見られた。

これらのことより、授業科目の配当学年・時間数、必修科目と選択科目の配置・配分・選択の自由度への学生の不満が明らかとなった。

それに対し教員は、授業科目の配当学年・時間数・科目間の重複に対する課題があるにとらえており学生との一致した意見をみているが、必修科目と選択科目の配置では両者に不一致がみられた。教員はカリキュラム上適切に必修科目と選択科目を配置しているとの認識であるのに対して、実際に受講している学生の満足度は決して高くないことが明らかとなった。今回の調査では、詳細な検討は行えていないが、自由意見からは選択の自由度が低いといった点への不満が記載されており、そのことも原因の一つと考えられる。他大学における調査⁵⁾においても、科目間の関連性や重複が適切でない科目がいくつかあることは、時間数の不足につながる事が指摘されている。今後は、本学においても科目名、時間数、学年

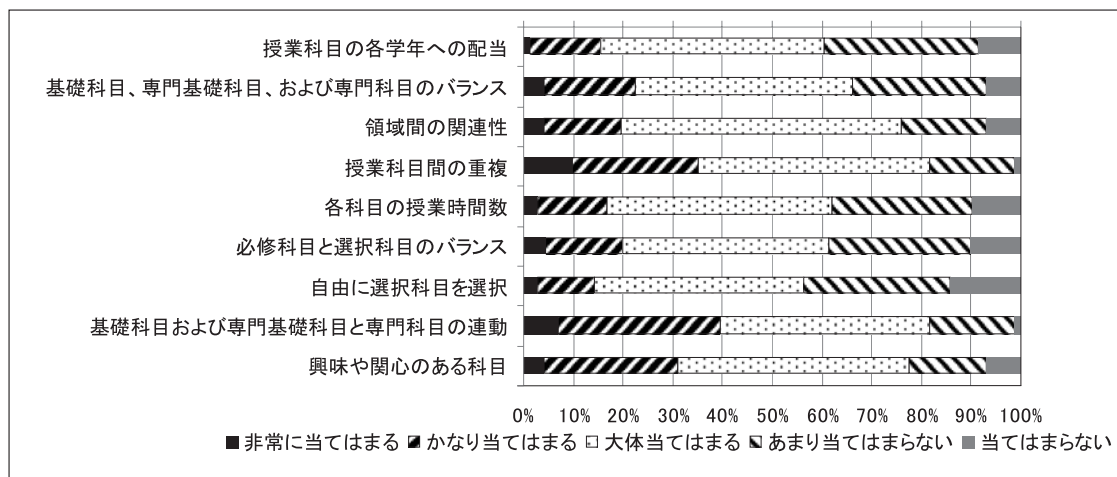


図 2-1 カリキュラムの編成について (学生)

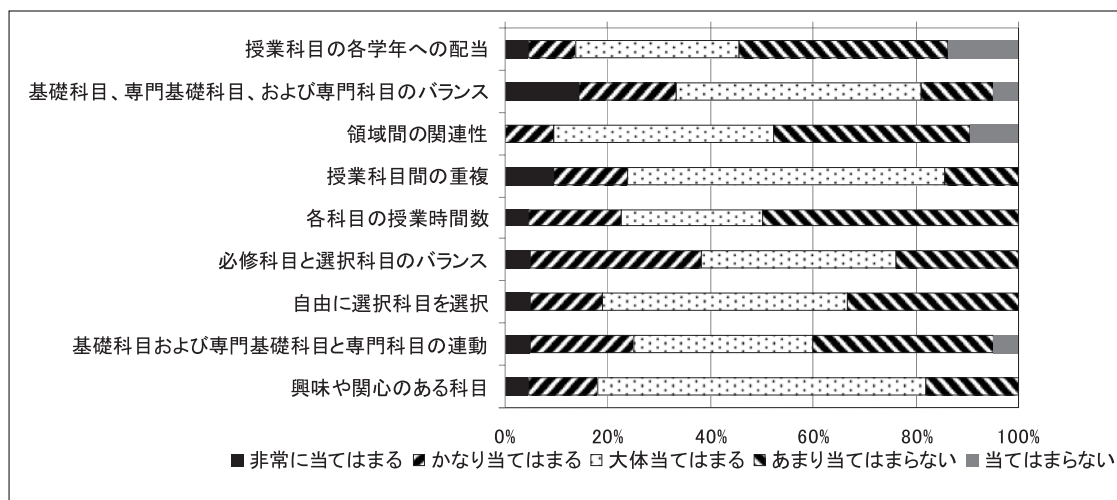


図 2-2 カリキュラムの編成について (教員)

配当等のみではなく、それぞれの授業科目の内容まで十分に加味したカリキュラムの設計が必要である。さらに、生じた問題点を補う為には、カリキュラムを運用する教員が密に連携し、教育内容の順序性や授業の構成に工夫を凝らすことが必要である。「8.基礎科目、基礎専門科目が専門科目を学ぶ上で役に立った」に対して、学生では

肯定的な回答が比較的多く、教員では否定的な回答が多かった。本学においても基礎科目から基礎専門科目そして専門科目へと展開していくカリキュラム構成がなされているが、その趣旨にそった教育について教員は不十分と感じているのに対して、学生においては比較的満足度が高かった。

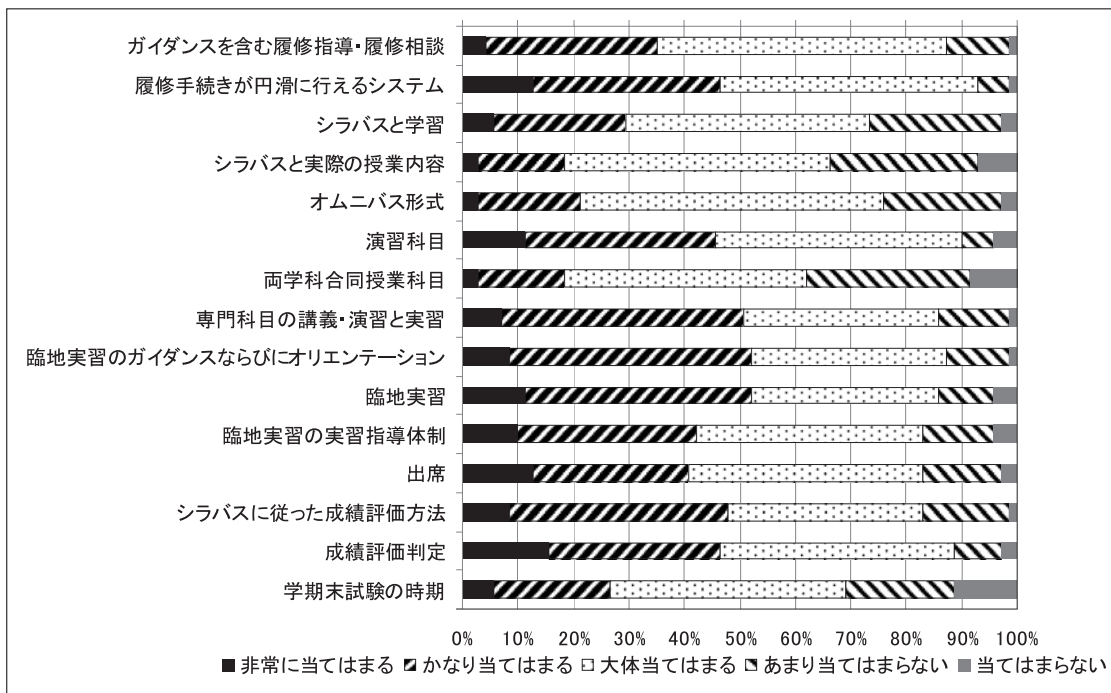


図3-1 カリキュラムの運用と学習支援（学生）

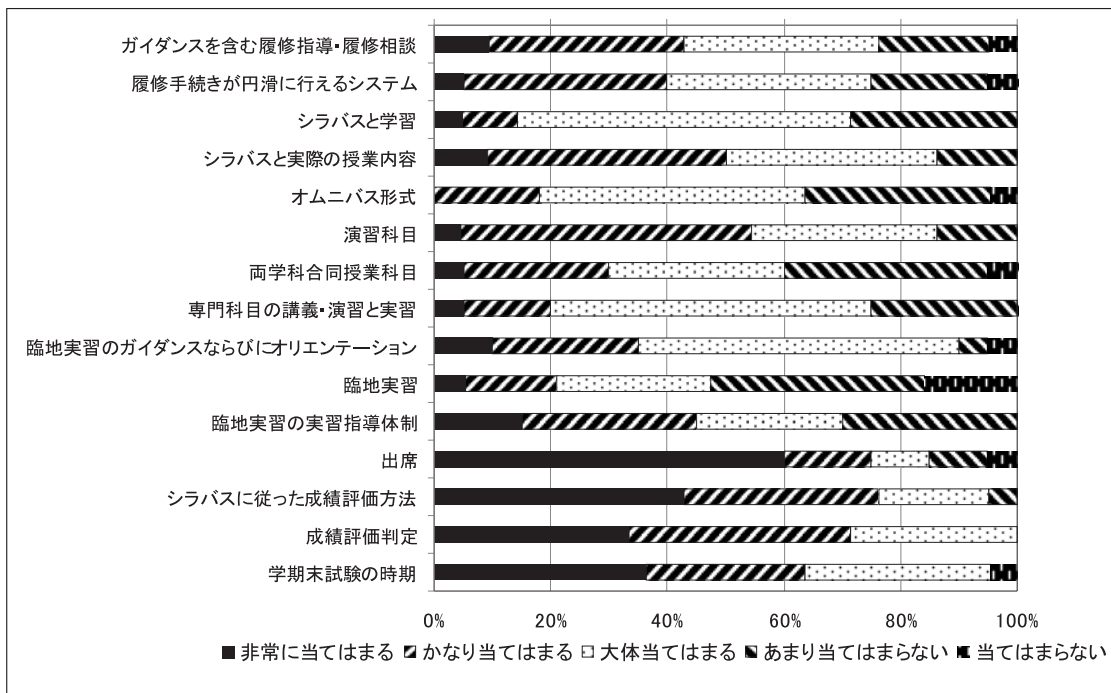


図3-2 カリキュラムの運用と学習支援（教員）

「4.授業科目間で重複する内容が多かった」については学生、教員ともに肯定的回答が多く、科目間の内容の重複が多かった事実がうかがえる。前述した他大学における調査⁵⁾においても、科目間の関連性や重複が適切でない科目がいくつかあることは、時間数の不足につながると述べられている。その一方で、科目間の有機的な内容の重複は学習効果上有効なこともあり、本学における授業科目間の内容の重複に対する解釈は難しいものと考ええる。しかし、カリキュラムの目標に照らして学生が成長しているかどうかは、そのプログラムに入学した学生の資質、教員によるところが大きく、また、学科目間の関連やどのような教授方略が用いられたかにもよるといわれているように⁶⁾、学科目間の関連を適切にすることは必要である。

Ⅳ. カリキュラムの運用と学習支援について

(図3-1, 3-2)

カリキュラムの運用と学習支援については、15項目の設問を設けた。学生では肯定的な回答が多くみられた。「3.シラバスが学習に役立った」では肯定、否定がほぼ均衡しており、教員でも、否定的回答の方が多かった。「4.シラバスと実際の授業内容が合致していたか」では、教員では肯定的回答が多かったのに対し、否定的な回答の方が多かった。シラバスの原稿の提出が前年度の12月であり実際の講義開始まで3ヶ月以上の期間があるため、その間に教員が一部修正を行った場合があったものと思われる。教員はシラバスを作成する段階で講義内容に関する詳細な検討を行う必要があるだろう。また、シラバスに修正があった場合には、できるだけ速やかに学生に周知することが必要であろう。

「7.両学科合同授業に関して」は、学生・教員とも否定的回答が多かった。学生を学科ごとに分けて、5段階に

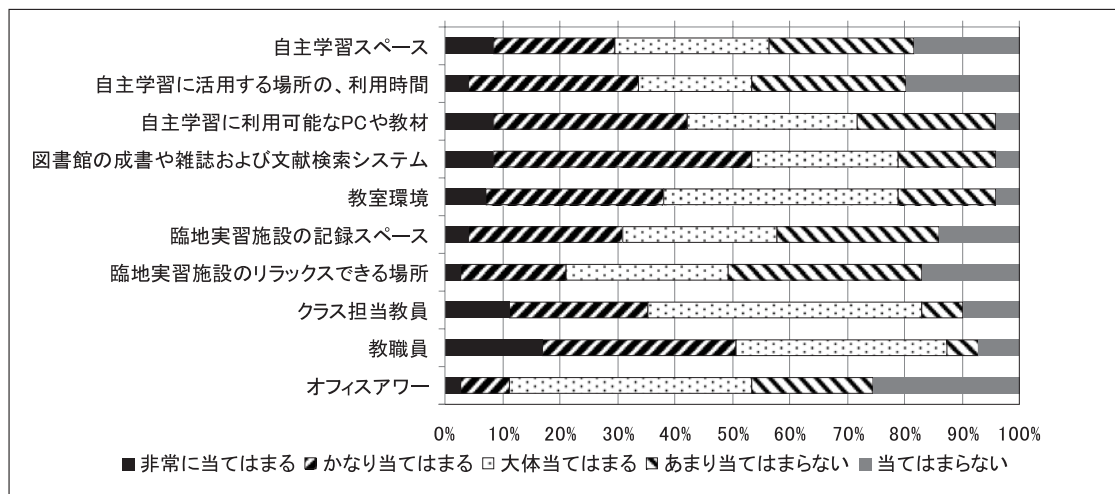


図4-1 学習環境について（学生）

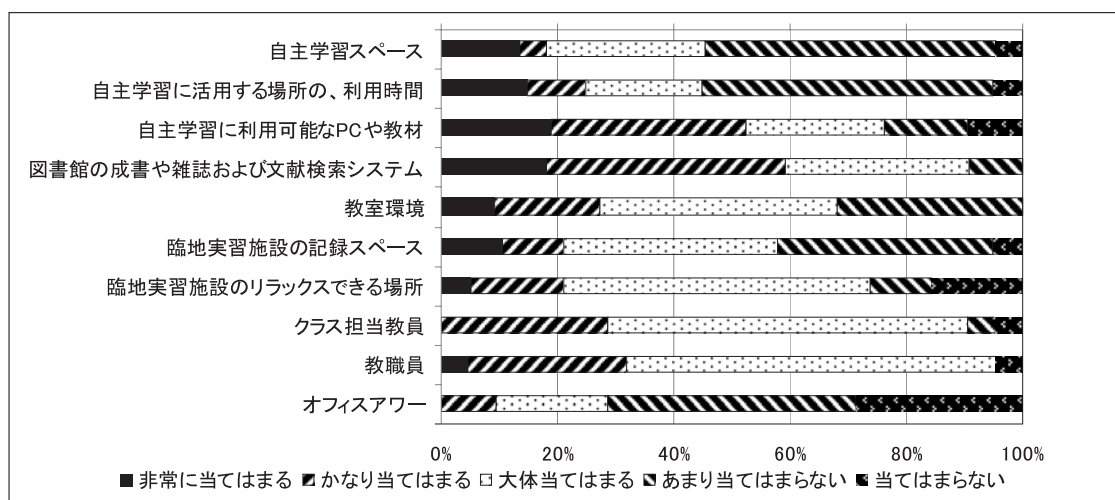


図4-2 学習環境について（教員）

分けた回答の平均値を臨床検査学科学生と看護学科学生で比較してみると、前者が平均2.26であったのに対して、後者では、2.71と差が見られた。さらに、積極的に肯定していると思われる回答4、5が臨床検査学科ではみられなかったのに対して、看護学科（編入学生を含む）では10名（19.2%）あり、学科の学生による意識の違いが見られた。この項目に関する自由記載意見では、臨床検査学科の学生から、「合同講義では、看護重視の内容が多かった」、あるいは、「内容が実際受けてみて必要とは思えなかった」等の記載があったが、看護学科の学生からは具体的な意見はなかった。また、教員からは、科目を絞る必要があるとの意見があった。合同講義については、今回の評価では必ずしも良いとは言えないが、これらのことを即改善点としてとらえるべきか現時点では判断の難しい点である。特に、合同講義はチーム医療における医療職の基礎知識の共有を目指したものであり、チーム医療を現場で十分に体験出来ていない学生の卒業時の印象のみで是非を決めることは適切でなく、卒業生を含めた今後の調査が望まれる。「15.学期末試験の時期について」では、学生では否定的回答が、教員では肯定的回答が多かった。しかし、自由記載欄にそれに該当する記述は見られなかった。

他に、教員では、否定的回答が多かったのは、「5.オムニバス形式は、学習上効果的であった」「10.臨地実習は満足するものであった」の2つの設問で、自由記載欄にはそれぞれに対し、オムニバス講義で各単元の時間などの配分が適切なかの疑問、実習施設の役割の明確化が必要といった意見が記述されていた。

V. 学習環境について（図4-1、4-2）

大学教育は、学生による自己学習を前提としてカリキュラムを設計しており、効果的なカリキュラム運用に向けては、自己学習を支援するための学習環境の整備が重要である。また、カリキュラムを考える上で、そのカリキュラムが適切に運用される学習環境があるかは非常に重要なファクターである。そこで、学習環境についての質問も行った。学生では、「3.自主学習に利用可能なPCや教材は十分揃っていた」「4.図書館の成書や雑誌および文献検索システムなどは充実していた」「5.教室環境は適切だった」「8.クラス担当教員によるサポートは学生生活を円滑に送るうえで助けとなった」「9.教職員は学生の関心事に耳を傾け、近づきやすい存在であった」で肯定的回答が比較的多く、教員の結果とほぼ一致していた。本学のパソコン、図書館、文献検索システム、机等の学習備品および教員の生活支援等については満足度が高かった。それに対して、自主学習する場所の確保が十分ではないと感じていることが読みとれた。

「6.臨地実習の施設で、記録等に活用できる十分なスペー

スがあった」「7.臨地実習の施設でリラックスできる場所があった」は学生では否定的回答が多く、教員でも同様であった。他大学における調査¹⁾でも、実習施設は学習環境として不適切であると答えた理由にカンファレンスルームの確保が困難ということがあげられていた。臨地実習のための附属施設を持たない本学においては、改善が難しい点もあると思われるが、実習先施設との相談により改善していくことが望まれる。

「10.オフィスアワーを利用して役に立った」では、学生、教員共に否定的回答が多くみられた。本学のオフィスアワーが開始されたのは対象学生が4年生になった平成19年度からであり、今回回答した学生については制度開始後1年で、入学時から活用できた制度ではなかったことが関与していることも考えられる。自由意見の中に、自分はオフィスアワーを利用しなかったが、制度自体は良いことであるとの意見もあり、今後、学生が利用しやすいように制度の改善、広報活動を行っていく必要があるものと考えられる。

VI. 看護学科学生が助産学科目選択履修をしなかった理由

（図5-1、5-2）

本学のカリキュラムでは、看護学科の学生は卒業要件の単位を修得すると、看護師・保健師の国家試験受験資格が得られる。それに加え、人数制限はあるが、希望により助産学科目の選択履修を行うことにより助産師の受験資格も得ることが出来るようになっている。現在までに、1期生、2期生が選択履修を行ったが、必ずしも多くの学生が履修を希望していない。助産科目の履修を希望しなかった理由について自由記載で回答してもらった。学生39名、教員12名で記載があり、複数の要因を記載していた者もいた。

学生が記載した中で最も多かった理由は、「興味、志向が無かった」との36%であり、続いて「国家試験が3つで大変（30%）」「時間が過密になる（20%）」「助産師の適性がない（6%）」「助産の実習が大変（6%）」「募集が終了していた（2%）」の順であった。

「興味、志向がない」「助産師の適性がない」との意見を除いた58%の学生が、必ずしも助産学科目の履修の希望が無いわけではなく、国家試験の受験準備や助産学の実習の負担が大きいと感じたため、履修を諦めたことが推測される。教員においても、「国家試験が3つで大変」「時間が過密になる」「実習が大変」の理由を合わせると44%であった。実際、助産学を履修した学生の自由記載の意見として、「4年次後期のカリキュラムの過密」を指摘したものがあつた。

また、「母性看護学実習を行う前に履修の選択時期を迎える学生には、イメージがつきにくかったのではないかとする意見も見られた。

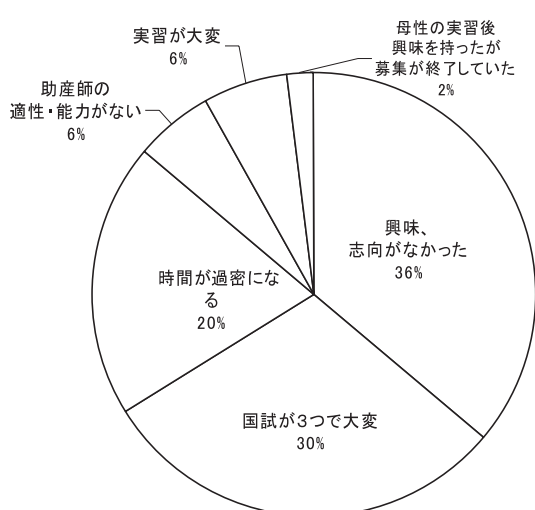


図5-1 助産科目を選択しなかった理由（看護学科学生）

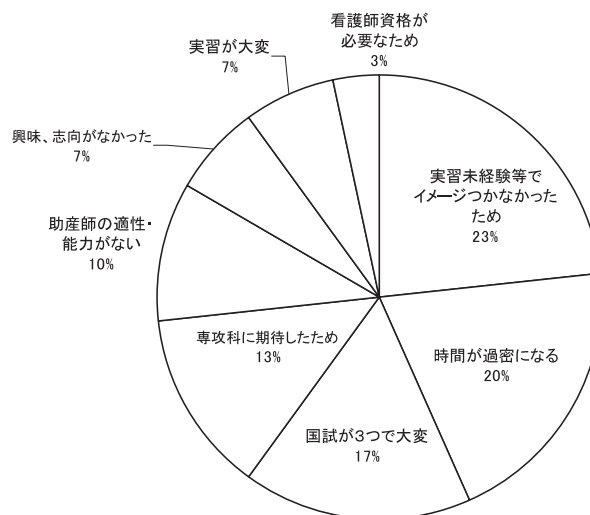


図5-2 助産科目を選択しなかった理由（教員）

表1-1 自由記載〈学生〉

()内は人数

項目	意見
教育目標の達成	1) 倫理観を養う時間は十分にあったが、科学的根拠に基づいた考え方が学べなかった。多少偏りがあったように思う。
カリキュラム編成	1) 1年の時には時間的・内容的に非常に余裕があったが、2年以降は大変だった。2) 2年次に専門基礎科目が詰まり過ぎている(2)。3) 実習時間のバランスに改善の余地があるのではないかと。4) 助産科目を履修したがカリキュラムが非常に過密であった。5) 各科目の授業時間を多くして欲しかった(2)。6) 選択科目は一択、二択しか出来なかった。7) 専門科目の時間が短大時代より少ないのは何故か分からない。8) カリキュラムは、必要科目をやらされた印象が残った。9) 実技演習を1～2年次にしか行わないので、実習時に生かせなかった。10) 臨床検査学科の食品関係の科目は1～2年次が良い。
カリキュラムの運用と学習支援	1) 4年の卒業研究が12月までかかり国家試験勉強が大変だった。2) 講義と実習の結びつきがなかった。3) 特に教養科目でシラバスと授業内容が違った。4) 国家試験に対応出来る講義をして欲しい。5) 両学科合同講義は騒がしかった。6) 両学科合同講義では看護重視の授業が多かった。7) 両学科合同講義は臨床検査には特に必要とは思わなかった。
学習環境	1) 図書館の開館時間が短い(2)。2) パソコン室・図書館を土日も利用出来るようにして欲しい(3)。3) 荷物をかけられる機が欲しい。4) オフィスアワーは利用する機会がなかったが、制度自体は良いと思う(2)。5) 臨地実習先の施設環境・指導体制が十分ではなかったように思う。6) 国家試験勉強時に暖房を7時頃まで入れて欲しかった。
その他	1) 授業評価の方法を変えてみてはどうか。2) 大学移行に教員のレベルがついていないように感じた。3) 教員は熱心に講義してくれた。4) 駐車場がないのがとても不便だ。5) 実習時、教員によって学びの深さに差があった。

表1-2 自由記載〈教員〉

()内は人数

項目	意見
カリキュラム編成	1) カリキュラムの科目の配慮や履修時期の問題があり、他の科目との連携が必要である。2) 編入生を含むカリキュラムなので、時間割を組むのが大変だと思う。3) 4年で教育する助産教育の形としてはよくないパターンである。4) 研究の位置づけがあいまいだった。
カリキュラムの運用と学習支援	1) 編入生の受講科目を担当教員に知らせることが必要である。2) 教えている技術と臨床やエビデンスの間に開きがあった。3) オムニバス講義で各単元の時間分配が不適切であった。4) 研究開始時期が遅かった。5) 特論演習担当教員の決定時期が遅かった。6) 特論演習の内容が不鮮明であった。7) 編入生への履修相談は教務委員しかできない。8) 両学科合同の授業を有効に行かせる運用が必要である。9) 両学科合同の科目を絞る必要性がある。10) 非常勤教員に依頼している科目の検討が必要である(2)。11) 実習施設の役割の明確化が必要。
学習環境	1) 国試に向けての勉強スペースが不十分である。2) 演習科目に対する教室の配慮が必要。
その他	1) 新カリキュラムにおいては、個々の講義の内容まで加味した、きめ細かい科目設定と本学が他の大学にはない特色のあるカリキュラムを期待している。

Ⅶ. 臨床検査学科学生の食品関連科目の選択志向

現在、臨床検査学科では食品関連の資格については、必修科目の単位をすべて取得し、卒業要件を満たせば、食品衛生管理者・食品衛生監視員任用資格が得られるカリキュラムとなっている。回答した19名中17名が、「選択科目であっても履修を希望する」としており、これらの資格取得に向けての強い意向がうかがわれた。

多くの学生が希望する食品関連の資格のための単位修得が、現状のカリキュラムでは必修科目として組み込まれており、臨床検査技師国家試験受験資格に加えて食品衛生管理者・食品衛生監視員任用資格が得られることが学生の指向性に沿ったカリキュラムとなっているものと考ええる。

Ⅷ. 自由記載意見（表1-1, 1-2）

カリキュラムの編成については、様々な意見が寄せられたが、学年配当に関する意見が多かった。また、大学では自己学習が重要視されているが、一部の学生からは、「現在の講義時間を増やし十分な講義時間をとって欲しい」との要望も見られた。教員では、カリキュラム編成における科目間の調整の必要性や、編入生を含むカリキュラム編成の困難さに言及しているものがあった。カリキュラムの運用と学習支援について、学生からは、前述した両学科合同講義への意見の他に、講義・実習の連続性に関する意見、シラバスとの整合性に関する意見があった。他方教員からは、科目間の連携、科目の内容、オムニバス科目の進め方等に関する検討の必要性が指摘された。

このように、学生からは、「カリキュラムの過密さや自由度のなさ」「教育内容への不満足感」「講義と実習との連続性のなさへの不満」が表出された。これらは限られた年限の中で、国家試験受験に必要な内容を提供する教育カリキュラムの難しさ、示しているとも言える。他方、教員からは、編入生を迎え入れる本学のカリキュラム編成の困難さがあるものの、「科目の位置付けを明確にすること」や「科目間の連携が必要であること」を記載している者がおり、教育内容の水準を保つ努力と各科目の内容の明確化を行った上での、講義間のみでなく、講義と演習、実習を含めた科目間の有機的な連携の必要性が示唆された。他大学⁷⁾においては、看護の分野で、領域を越えたチームティーチングの導入を行っている所もあり、負担感よりやりがいがあったとの結果が出ている。今後、これらの方法も視野に入れ、科目間の連携を深める必要がある。

学習環境に関しては、学生から「図書館・パソコン室・学習室の使用時間の拡大」に関する要望が多く見られた。特に、「図書館の休日開館への要望」は強いものと思われる。また、「実習先の施設環境・指導体制の不十分さ」を指摘する意見もあった。学内のみでなく、実習先も視野

に入れた学習環境の整備はまだ十分とは言えず、それらを整備していくことも、カリキュラムを運営する上で、また、学生の学習を促進する上で必要なことであろう。予算的な裏付けの必要な事項もあり、早急な改善は難しい面もあるが、学習環境の整備を少しずつ改善していくことが今後必要と思われる。

おわりに

今回、愛媛県立医療技術大学第一期生の卒業に際し、筆者らは、本学の卒業生及び教員に対する調査を実施し、その結果に基づきカリキュラム評価を行った。今回の結果は、卒業時における評価であり、卒業後に専門職として働く中で、学生時代には不要であると感じた内容が重要であることに気付く等、評価が変化してくることは当然考えられることである。本学の教員としては、今回の調査結果で示された学生の感じたことを十分に考慮しつつ、教員の立場から学生に学ばせたいことを十分に吟味して教育を行うことが必要と考える。さらに、卒業生も対象とした今後の継続した調査による評価が行われることが望まれる。今後、この度の質問紙調査の結果を、カリキュラム並びに教育活動の改善点としてまとめ、カリキュラム改正やFD活動に生かすことのできる具体的な資料を作成していきたい。

資料 1 「カリキュラム評価」に関するアンケートのお願い

教務委員会では今回、4年間カリキュラムを運用した結果を評価するために、学生の皆さんに意見や感想を聞くことになりました。これは、大学のカリキュラム運営改善の資料の一部にするためのものです。アンケート結果は、個人が特定できない形での集計結果の公開及びそれによる教務活動の改善以外の目的で使うことはありません。以下のアンケートにご協力よろしくお願ひします。

あてはまる項目すべてに○をつけて下さい。

性別 1. 男性 2. 女性

所属 1. 看護学科（助産学選択履修生を除く） 2. 臨床検査学科 3. 助産学選択履修生

以下の質問に対する回答を5つの選択肢から選んで数字に○をつけて下さい。

非常に当てはまる	かなり当てはまる	大体当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
5	4	3	2	1

I. 教育目標の達成状況

この大学の学習を通して、

1. 深い人間理解と高度な倫理観を養うことができた。 5・4・3・2・1
2. 生命の尊厳を基盤とする態度を養うことができた。 5・4・3・2・1
3. 豊かな感性により人間の感情・意思及び自己決定権を尊重する態度を養うことができた。 5・4・3・2・1
4. 高度の専門知識・技術を身につけることができた。 5・4・3・2・1
5. 科学的根拠に基づいて実践する能力を身につけることができた。 5・4・3・2・1
6. 保健・医療・福祉・教育など他の専門職の役割を理解し、柔軟に協調・協働できる態度を養うことができた。 5・4・3・2・1
7. 職業人として自らの行動に責任を持つ態度を養うことができた。 5・4・3・2・1
8. 主体的に学習する態度が身についた。 5・4・3・2・1
9. 医学・医療技術の進歩発展や、保健医療に対する社会の変化・多様化に柔軟に対応できる力を養うことができた。 5・4・3・2・1

II. カリキュラムの編成について

1. 授業科目の各学年への配当（配置）は学習するうえで適切だった。 5・4・3・2・1
2. 基礎科目、専門基礎科目、および専門科目のバランスは適切だった。 5・4・3・2・1
3. 基礎科目、専門基礎科目、および専門科目の領域間の関連性が適切にとれていた。 5・4・3・2・1
4. 授業科目間で重複する内容が多かった。 5・4・3・2・1
5. 各科目の授業時間数は適切だった。 5・4・3・2・1
6. 必修科目と選択科目はバランスよく配置されていた。 5・4・3・2・1
7. 学生が自由に選択科目を選択することができるように、授業科目が配置されていた。 5・4・3・2・1
8. 専門科目において、基礎科目および専門基礎科目で学んだことが役に立った。 5・4・3・2・1
9. 興味や関心のある科目が多く設定されていた。 5・4・3・2・1

Ⅲ. カリキュラムの運用と学習支援

- | | |
|---|-----------|
| 1. ガイダンスを含む履修指導・履修相談が適切になされていた。 | 5・4・3・2・1 |
| 2. 履修手続きが円滑に行えるシステムが整っていた。 | 5・4・3・2・1 |
| 3. シラバスは学習に役立った。 | 5・4・3・2・1 |
| 4. シラバスと実際の授業内容は合致していた。 | 5・4・3・2・1 |
| 5. オムニバス形式（複数の教員が分担して担当する授業科目）は、学習上効果的であった。 | 5・4・3・2・1 |
| 6. 演習科目では、演習が効果的に行われていた。 | 5・4・3・2・1 |
| 7. 両学科合同授業科目は、学習に効果的であった。 | 5・4・3・2・1 |
| 8. 専門科目の講義・演習で学んだことが、臨地実習で生かされた。 | 5・4・3・2・1 |
| 9. 臨地実習のガイダンスならびにオリエンテーションは適切だった。 | 5・4・3・2・1 |
| 10. 臨地実習（実習施設、時期、期間など）は満足するものであった。 | 5・4・3・2・1 |
| 11. 臨地実習の実習指導体制は適切だった。 | 5・4・3・2・1 |
| 12. 出席は適切にとられていた。 | 5・4・3・2・1 |
| 13. 成績評価方法は、シラバスに従い適切だった。 | 5・4・3・2・1 |
| 14. 成績評価は納得がいく判定がなされていた。 | 5・4・3・2・1 |
| 15. 学期末試験の時期は適切だった。 | 5・4・3・2・1 |

Ⅳ. 学習環境について

- | | |
|---|-----------|
| 1. 自主学習ができる十分なスペースがあった。 | 5・4・3・2・1 |
| 2. 自主学習に活用する場所の、利用時間は十分あった。 | 5・4・3・2・1 |
| 3. 自主学習に利用可能な PC や教材は十分揃っていた。 | 5・4・3・2・1 |
| 4. 図書館の成書や雑誌および文献検索システムなどは充実していた。 | 5・4・3・2・1 |
| 5. 教室環境（机、イスの配置など）は適切だった。 | 5・4・3・2・1 |
| 6. 臨地実習の施設で、記録等に活用できる十分なスペースがあった。 | 5・4・3・2・1 |
| 7. 臨地実習の施設で、リラックスできる場所があった。 | 5・4・3・2・1 |
| 8. クラス担当教員によるサポート（個別相談、進路相談など）は学生生活を円滑に送るうえで助けとなった。 | 5・4・3・2・1 |
| 9. 教職員は学生の関心事に耳を傾け、近づきやすい存在であった。 | 5・4・3・2・1 |
| 10. オフィスアワーを利用して役に立った。 | 5・4・3・2・1 |

V. 次の質問はそれぞれの学科に所属する学生のみ答えてください。

(看護学科)

本学では、4年次に開講する助産学授業科目を選択履修すると助産師の国家試験受験資格が得られます。あなたが助産学授業科目を選択履修しなかったのは何故ですか、自由に記載して下さい。

(臨床検査学科)

食品衛生管理者・食品衛生監視員任用資格を取得するのに必要な科目が選択科目の場合は、あなたは選択しますか。

1. 選択する。 2. 選択しない。

VI. 自由記載欄

*上記の質問項目で「当てはまらない」に○をつけた方は、その理由を具体的に記入してください。

*そのほか大学のカリキュラムに関して、意見や要望など自由に記入してください

アンケートにご協力有難うございました。

教務委員会

引用文献

- 1) 杉森みど里 (1999) : 看護教育学第3版, 79, 医学書院
- 2) 高島尚美 (1996) : カリキュラム評価の意義と役割, 「新カリキュラム評価に視点と方法」, 藤岡完治 / 「看護教育」編集室編, 6-12, 医学書院
- 3) 小澤美智子, 助川尚子, 菊田文夫他 (2000) : 卒業時の学生によるカリキュラム評価, 聖路加看護大学紀要, 26, 133-142.
- 4) 黒田裕子, 濱田悦子, 池川清子 (2002) : 日本赤十字看護大学における第3次カリキュラム評価に関する報告, 日本赤十字看護大学紀要, 16, 45-53.
- 5) 川越博美, 有森直子, 射場典子他 (2001) : 教員によるカリキュラム評価, 聖路加看護大学紀要, 27, 87-96.
- 6) MARILYNH. OERMANN¹, KATHLEEN B. GABERSON (1998) : Evaluation and testing in Nursing Education, 2001 ; 舟島なをみ, 看護教育における講義・演習・実習の評価, 283, 医学書院
- 7) 及川郁子, 菱沼典子, 亀井智子他 (2006) : 2000年度から2004年度カリキュラム総括評価—その1—4年ごとの評価より—, 聖路加看護大学紀要, 32, 59-64.

謝辞

稿を終えるにあたり, 本調査の主旨をくみ, 真摯に御回答いただきました学生諸氏及び教員の皆様に御礼を申し上げます。また, 集計作業にご協力いただきました臨床検査学科生体情報学講座, 伊藤晃先生に深謝いたします。

要旨

第1期生からの本学のカリキュラム評価を得る為に調査を行った。また, 対比の為, 教員に対しても同様の調査を行った。その結果, 教育目標の達成状況に関しては, すべての項目において肯定的回答が多く, 教員に比べ高い評価であった。カリキュラム編成に関しては, 学年配当, 時間, 選択科目と必修科目とのバランス, 選択自由性について否定的回答が多く, 科目間の内容の重複が多いとする回答が多かった。カリキュラムの運用と学習支援については, 肯定的回答の多い項目が多かったが, シラバスの有用性と両学科合同授業に関しては否定的回答をする者が多かった。学習環境については, 学内での自主学習する場所や臨地実習の施設における学習環境を不十分とする回答が多かった。